

ぼくの町には運河がある。モント川とオーデ川を結ぶその運河は、ぼくが生まれるずっと前に、マージによって作られた。マージはぼくの祖父の兄にあたる人で、昔は土木設計師だった。あちこちに彼の作った水路、池、港、ダムなどが残っている。しかし、マージにとつてこの運河がもっとも愛着があった。運河を見おろせる小高い丘の上の家に一人で住んでいた。マージは子供も孫もいなかった。ぼくと弟をよくかわいがってくれた。ぼくたちはよく彼の家から運河を眺めたものだ。

運河が往来する船で栄えたのは遠い日のことだ。町は活気があり人々にぎわった。ぼくは、それを知らない。

鉄道がこの町を通る計画がたてられた時には、町中が反対した。もちろんだ。町は運河によって成り立っていたのだから。鉄道なんて通つたら、仕事がなくなってしまう。

鉄道はこの町を避け、隣の町を通ることになった。

その後、当然のように輸送は船から鉄道に移っていった。時代の流れというものだ。そして、運河を通る船はなくなった。隣の町は栄え、この町は寂しくなった。

現在、運河は忘れられ、眠りつつける巨人のようにひっそりとたたずんでいる。

だから、今度、運河の一部を埋めてその上に高速道路を通すことになった時には、少数の者をのぞいて、反対する者はいなかった。

反対する人たちは言った。

「運河は過去に、この町をうるおしてくれた。船が消えた今も、運河の流れや河岸の緑は私たちの目を楽しませてくれている」

ぼくも同感だった。それになによりも運河はマージが一所懸命になって作り、今でも大切にしている。そして、丘の上から毎日、懐かしそうに暖かい目で見守っている。

しかし、マージは高速道路に反対ではなかった。彼は静かにぼくに話してくれた。決して負けおしみてはなかった。

「うん、確かに運河を残したい人の気持ちもわかる。私だって運河はかわいい。私の若い日の情熱と思い出をそのままの姿でとどめているように見える。だが、私の作った運河は本当にみんなのためになったのだろうか。この運河のせいで鉄道が通らなかった。それに、この土地や自然は運河ができるのを本当に望んでいたのだろうか。運河を作る時に、森を切りはらい、丘を削りくずし、野原を無残に掘りかえしてしまつた」

「運河が作られる前の自然は忘れられ、今では運河に郷愁を

覚える。しかし、運河が埋められ、その上に高速道路が作られれば、やがて運河のことも忘れられるだろう。何十年かたち、高速道路が古くなり、それを壊さなければいけなくなる頃には、その高速道路に郷愁を感じる者が出てくるかもしれない。それに、高速道路を作る設計師だつて、私と同じように仕事に誇りを持っているだろうし、できた道路に愛着を感じるだろう」

マージが言うのを聞いて、ぼくもそのような気がしてきた。結局、町の人々の意見はそろって、高速道路を通すことになった。何年か後に運河のかわりに高速道路ができるだろう。その時にはまた、この町も変化しているだろう。

マージが冬を越せたのは、ある意味で奇跡と言えるかもしれない。すっかり弱っていて、現に何度か高熱を出し、あぶない時もあった。

ぼくたちもマージの容体を気にして、ぼくたちの家にくるよう勧めたが、彼は丘の上の家をはなれようとはしなかった。マージは言った。

「ありがどう。みんなの気持ちはうれしいよ。でも、私はここに住んでいたいんだ。ここからは運河が見えるし、この風景が好きなんだ。あの運河が私のどちらが消え去るまで、私はこの家にいるつもりだよ」

これにはぼくたちも無理に反論することはできなかった。そのかわり、みんなで交代で看病した。

その日はぼくがつきそっていた。春の夕暮れ、薄かったもやは次第に濃い霧に変わっていった。何日前から、マージは具合が悪く食欲もなくなっていた。ぼくたちはとてもそれを心配していた。まどの外は少しづつ暮れていった。すっかりミルクのようになった霧が横に流れて、少し先の立木が、ぼんやりとした影になった。ぼくたち二人だけが白い闇のなかに取り残されていくような気がした。

その時、かすかに遠くのほうで霧笛の音がした。

「ねえ、マージ、聞こえた？ 今、霧笛が鳴つた……ほら、やはり鳴っている」

「まさか……昔はこんな霧の深い日は、運河を行く船が霧笛を鳴らしたものだ。今は船も通らないし……うん？ あれは？ 私にも聞こえた。遠いけれど」

ぼくたちは耳を澄ませた。厚い霧のベールを通して運河のほうから、しかも徐々に大きくなってくる。確かに霧笛の音が聞こえる。

「船だ。私の運河をモント川のほうから船がやってくる」

マージは目を輝かせて、ぼくに言った。その目は何かを思い出しているようだった。

ぼくはやはりやって良かったんだと思った。マージをだます

ことに初めはうしろめたさもあったが、ぼくはこの日のために町場のカルノさんに頼んで霧笛を作ってもらった。

それを弟が運河の岸で鳴らしているのだ。

「ああ、懐かしいな。もうじきこのあたりを通る。霧が濃くて窓から見えないが。私の運河を船が通っている」

マージはうっとり目を閉じて、群れからはぐれた象が鳴いているような哀しい霧笛の音を聞いている。その時、足音がしてドアが開いた。弟だった。ぼくはあわてて弟を外に押しもどす。たしなめて言った

「じーつ、おい、せっかくの計画が台なしになるだろう」

弟は丘を駆けあがってきたため、息をはずませながら言った。

「船が……ぼくが霧笛を鳴らしていたら……霧の中を……船が運河を通っているんだよ……ほら、聞こえるでしょう？ 霧笛の音が……ぼくはここにいるのに」

半信半疑のぼくにも聞こえた。運河のほうで太い霧笛の音がする。

ぼくと弟は丘を駆けおりていった。運河の岸は浅い緑でおおわれていた。運河は濃い霧につつまれていた。霧笛の音がゆくりと近づいてくる。そして、霧の中に黄色いフォグランプをともした黒い船が浮かびあがってきた。霧笛が断続的に響く。ぼくたちはその幻影のような船を運河にそって追いかけた。

やがて船は運河からオーデ川にゆくりと出ていった。その黒い影は霧に溶けこんでいく。霧笛の音も遠ざかっていく。

立ちつくしたままそれを見送るぼくは、マージのことを思った。あの船とともにマージも消えていくのじゃないかと思った。そして、もうじきこの運河も……

「さよなら、マージ、ぼくはマージのこと、忘れないよ。さよなら、ぼくはマージの運河のこと、いつまでも忘れないよ」消えていく船に向かってつぶやくぼくの類は、霧と涙でぐっしりと濡れていた。

(『火星の砂時計』株式会社サンリオ1988年現在は絶版)

【感想】

名前 ()

()

雨雲は低く海辺の町にかかっていた。雨の季節にはいつてから晴れた日はほとんどなく、海は鉛色に澱み灰色の空と遠くの方で溶けあって見えた。夏には賑わうこの町も今の時期は人影も少なく閑散としている。港から続く石畳の坂道は雨に濡れ、家々の窓の明りをうつして光っていた。

金や銀の装飾品、置き物、食器などがまぶしいばかりに並んでいる店の中に若い男女の客がいた。そして金の指輪を二つ選ぶと、店の主人に名前を彫ってもらおうようにたのんだ。主人は愛想よくひきつけ、ベルを取り上げて鳴らした。奥の方では、いと返事がして少年が出て来た。

「ヨーヨー、この指輪をひと走りのんだよ。これがお名前だ」

ヨーヨーと呼ばれた少年は指輪を大切そうに茶色のバッグにしまい肩にかけた。

「はい、わかりました。行って来ます」と元氣よく答えると、傘をさしバッグを胸に抱き雨の町に出て行った。濡れた道に気をつけながら小走りにかけて行き、ある家の前で立ちどまった。

「グールトさん、ほくです」と少年はドアを叩いて言った。グールトは机に向かい銀のスプーンに飾りを彫っているところだった。青いエプロンを膝の上にひろげているのは仕事に出る金銀の切り屑を集めるためだ。それらは細工の手間賃よりもいいお金になる。しかしグールトは律儀な職人気質を持っているし、わざと深く彫って切り屑をふやそうとはしない。あくまでも自分に満足がいくように美意識を持ち繊細に几帳面に無駄なく彫っていく。

「おはいり」とグールトは顔を上げずに答えた。「こんにちは、グールトさん。今日ははじめてです」とヨーヨーは言ってグールトの仕事机の横にやって来た。「これをお願いします。お客さんが、お待ちです」

「ほう、エンゲージ・リングだ。ヨーヨーも今に買う時があるな。名前は……と」少年は恥ずかしそうにして、名前が書いてある紙も渡した。「はやくして下さいよ、お待ちなんですか」

グールトは慣れた手つきで器用に文字を刻んでいく。少年はその手先を感じてじっと見つめていた。ちいさい声でグールトがつぶやいた。

「お母さんの許しがあれば私のところへ来てほしいんだよ」「ううん、他にもやりたいことがあるし、まだわかりません」「はい、できあがり。ええと文字数は……この伝票も頼んだよ」

「グールトさん。どうもありがとございました」ヨーヨーはまた大事そうに指輪をバッグに入れると元氣にとび出して行った。

その夜グールトは銀の皿のふち飾りを彫っていた。雨の音だけが聞こえてくる静かな夜だった。ドアを叩くものがあった。グールトはこんな時間に誰だろうと思いつつ鍵を開けた。暗い玄関にぼつんとヨーヨーよりいくつか年上で金色の髪の毛の少年が立っていた。

「こんな遅く何の用だい」とグールトはこの町で見かけない少年に尋ねた。大きな板のようなものを抱えた少年がちいさく口を開いた。

「腕のいい彫金師がいると聞いたんです。これを彫ってもらいたいんです」

包みを解くと輝く純金の板が六枚あらわれた。グールトは驚いてチェリー色の頬の少年の顔を見た。

「理由は聞かないで下さい。こちらが下絵です。お願いできますか」

やさしい笑顔をして下絵をグールトに手渡した。風を切つて海原を走る海賊船、勢よく跳びはねるイルカ、車のついた大砲を引く象、剣を振りかざした鎧兜の戦士、翼のあるドラゴン、巨大な飛行船、六枚の絵はどれも精巧で美術的にも美しいものだった。グールトは見ているうちに興味が胸の底から湧きおこってくるのを感じた。

「ううん、素晴らしい。やらせてもらおうかな。だが店のほうに頼まれている仕事も多いので……そうだな、これだと三週間ばかりはみてもらいたいな」

少年は少し考えて、大丈夫、まにあうな、とつぶやき、言った。「それじゃあ、お願いします」

グールトは少年の空想力に感えて丁寧に美しい作品に仕上げてやろうと思った。毎日、あいまをみて金の板に少しずつ下絵どおりの線を細かく刻んでいった。熱中しているうちに真夜中になってしまふこともあった。店から使いで来るヨーヨーもこれらの絵に魅せられ、来るたびに出来上がり具合を横でじっと見ていくのだった。グールトは腕のぶるいがあつたし、ヨーヨーは船乗りの夢をかさねたり、伝説の英雄に憧れたり、青い空に飛行船が浮かぶのを想像したりした。

三週間が過ぎた。夜になると雨がさがり南側の窓が強い風でガタガタと鳴った。南風が吹くと、長かった雨の季節が終り、明るい夏がはじまるのだった。グールトは最後の仕上げを施していた。数日前にすでに完成していたのだが、約束のその夜まで気になる部分をよりきれいになるように手をくわえていた。ドアを叩く音がして例の不思議な少年の声があった。グールトは

満足そうにドアを開けにいった。

少年は頬を紅潮させて言った。「今晚は、出来ましたか」

グールトは微笑みながら招き入れ椅子をすすめた。「きつと気に入ると思うよ。私もいい仕事をさせてもらったことを感謝したいね。余った時間で念入りに仕上げさせてもらったし、変わりばえのないいい飾りや、アルファベットと違って心をひかれるものだった」

少年は渡された六枚の金の板に彫られた絵を丹念に調べながら言った。「やはり評判どおりです。これだけ美しくしっかり彫られているなら大丈夫。きつとくつきりと浮かび上がるでしょう」

「えっ、何が浮かび上がるんだって」グールトは疑問に思つて少年に尋ねた。

「ええ、皆さん確かに驚きますよ」

「えっ、誰が驚くって」

グールトは少年が帰ったあと、手間賃に受け取った数枚の金貨を大切にしまつと、何かおかしな気分になって笑いだした。

「私もヨーヨーやあの少年のような頃があった。机に向かつてこつこつと仕事をしている今は、比べようもなく世の中のことを知らなかったかわりに、世界は希望や憧れに満ちていた」

その夜、グールトは暖かい眠りに包まれた。きらきらと海は金の屑をまき散らしたように光り空は青く澄んで水平線も明瞭に見えた。

何日かたった朝、グールトはヨーヨーに起こされた。

「グールトさん。きのうの夜、見ましたか」ヨーヨーは興奮気味に言った。

「いや、疲れて早く寝てしまったけれど。何かあったのかい」

「星が凄くきれいだったんです。それがまったくへんてこりんな星座だったんです。前にグールトさんが金の板に彫っていた絵、あつたでしょう。あれなんです、それらの星座は。海賊船にイルカに飛行船、象に戦士、それにドラゴン。金色で美しいあの絵が夜空に描かれていたんです」

彼は微熱があるかのように一生懸命、前夜の奇跡について説明した。

グールトは半信半疑に聞いていたが、あの少年のしわざに違いないと思った。そしてその夜、空に彼の作品がどんな具合に仕上がっているのか自分の眼で確かめてみようと思つた。

(『火星の砂時計』株式会社サンリオ 1988年 現在は絶版)

仮面師ハルムの弟子のセイジは、まったく、とてつもない大きなことをやらかしたものだ。村人たちはみな、尊敬と驚嘆のいりまぎった賛美の言葉をセイジに送っている。

セイジの岩山には、うわさを聞いた人々がその大きな成果を一目見ようと、遠くのほうからもやってくるようになった。やがて、その場所が巡礼地として賑わうようになるのではないかと地元の人々は話している。

おまけに、セイジときたら、それ一つだけに飽き足りないで、早くも次の岩山にとりかかっている。そうだから、「セイジは本当に凄い奴だ」という評判はやがて、いっそう確かなものになるだろう。

このままいくと、セイジのやらかしたものは、あちこちに残るだろうし、きっと多くの人々によって、この物語はのちのちにまで語りつがれることになるだろう。

仮面師ハルムの作る仮面は、どれも感情ゆたかで素晴らしいものだった。「冬の孤独」と題した年老いた男の仮面は、人生の哀愁と奥深さを感じさせたし、「白い微笑」と題した女の子の仮面は、無邪気さと若さの喜びをあふれるほどに表現していた。ハルムの作る仮面はどれも、見る人に最大の感動と想像力をあたえた。しかも、その仮面の表情は見る人によって、微妙に変わったし、同じ人間が見ても、見る時によってまったく別の仮面のように感じられた。

その典型が「無の鏡」と題した仮面だった。この仮面は見る人によって、それぞれがみな違う感想を述べた。

ある人は、この「無の鏡」の仮面を見て、「これは、かしこそうな男の子が何かを考えている顔だ」と言った。また、別の人は、「この仮面は、年老いた上品な女性が故郷を懐かしがっている顔だ」と言った。この仮面は見る人によって、老若男女、喜怒哀楽、実にさまざまな異なる顔と表情を見せた。この仮面は、「無の鏡」という名前どおり、見る人の心をうつす鏡のようだった。

セイジが、仮面師ハルムの弟子になろうと決心したのも、彼がこの「無の鏡」の仮面に出会ったからだ。彼はこの仮面を見て、遠くのはるかな水平線を見つめている少年の顔を思い浮かべた。

仮面師ハルムは、弟子にしてくださいというセイジを簡単に受け入れてくれた。セイジは、あまりにあっけなくハルムが彼を弟子にしてくれたので、肩すかしをくったようだった。セイジは、ハルムの家のはなれに住むことになった。そして、彼はハルムの弟子として、毎日の雑用や仕事の手伝いをするように

なった。

ハルムとともに暮らすようになって、セイジはいっそう彼に対する信頼と尊敬をまわしていった。ハルムの生活態度は質素でおどりのないものだったし、仕事は厳格でごまかしのないものだった。

ハルムは、一日のほとんどを仕事部屋で過ごした。仮面を彫っている時の彼の横顔は厳しく、セイジが言葉をかけるすきもなかった。しかし、日常に関しては、ハルムはセイジに対して寛大なところを見せた。セイジが不慣れから少しぐらい失敗しても、「今度から、気をつけなさい」と言っただけだった。

ところが、セイジが弟子になって随分たっても、ハルムは仮面を彫る技術を彼に一つとして教えてくれなかった。

ハルムはセイジに言った。

「時間があつたら、私が仮面を彫っているところを見なさい」だから、セイジはよくハルムの仕事を横で黙って見ていた。ハルムも、セイジがよいがいがいが、いつも黙々と仮面を彫りつつづけていた。

ハルムは仮面の彫り方を直接、セイジに教えたりはしなかったが、時々、手があいた時に話しかけてくれた。その話は、仮面とは無関係な話も多かったが、セイジはどの言葉も心にきざみつけておこうと思った。

ある時、ハルムはまだノミを入れていない木のかたまりを前にしてセイジにきいた。

「この木を見て、何が見える？」

セイジはその木のかたまりを長い間じっと見つめていたが、あきらめて答えた。

「わかりません」

ハルムは、別の同じような木の素材をならべて言った。

「この木も、この木も、同じ木だし、形も大きさも似ている。しかし、私にはそれぞれ別の顔が隠れているの見える。いいかい、私はこの木に埋もれている顔をそのままの形に彫り出してやるだけなのだ。私が仮面を作るのじゃない。この木の中にある顔を、私は彫り出すだけなのだ」

セイジはハルムが言おうとしていることが、何となくわかるような気がした。しかし、どれだけ見なおしても、木の中にひそんでいるという顔を見ることはできなかった。

ハルムはその木の一つを前に置くと、ノミとハンマーを持ち、彫りはじめた。大胆に粗削りをはじめると、仮面の輪郭がおぼろに浮かびあがってくる。そして、いくつものノミに持ちかえながら彫りすすむと、木の中に埋もれていた顔が現われてくる。その仮面は幼い男の子の顔のように見えた。そして、その仮面を横に置くと、ハルムはもう一つと同じような木のかたまりに

とりかかった。

ハルムの魔術師のような腕によって、木の中に眠っていた顔が目覚めはじめた。今度の木からは女性の顔が浮かびあがってきた。

セイジは言葉もなく、ハルムの不思議な手先をただぼうぜんとして見つめるだけだった。

セイジは毎日、ハルムの作業を見て、その一つひとつを頭にたたきこんで、自分でも仮面を彫ってみようとした。しかし、セイジには木に埋もれているという顔も表情も見通せなかったし、ハルムのようにそれを彫り出してやることもできなかった。セイジの彫る仮面は、まだまだ未熟だった。

季節は流れ、時が過ぎていく。

セイジは仮面を幾つもの彫りつつづけたが、相変わらず、思いどおりの仮面を彫ることはできなかった。失敗作が山のよりに積み上げられていく。

ある日、セイジはいつものように森の中を歩いていた。ハルムが森の木を見ていると、その木の中に埋もれている顔が見える、と教えてくれたことを試しているのだ。しかし、セイジには森のどの木にも顔を見ることはできなかった。

セイジは一休みして、その岩山をぼんやりと眺めていた。ふと、彼の頭にひらめくものがあった。彼は、岩山を凝視した。

「やはり」セイジは背中何かが走るのを感じた。大地に眠る偉大な神の啓示だろうか。セイジは、ふたたび、岩山を見た。

セイジは、確かに岩山に埋もれている顔を見たのだった。彼は急いでノミとハンマーを取ってくる、その日から岩山にとりかかった。そして、大変な苦勞の末に、今、評判になっている岩山の巨大な顔を彫りあげることができたのだ。

もちろん、そのときはばえは師匠の仮面師ハルムによって保証されているし、その素晴らしい顔を拝みに遠くからも人がやってくるようになった。

そして、人々の絶賛と期待を浴びたセイジは、今は次の岩山に埋もれている顔を彫り出そうと、一生懸命になっているということだ。

ぼくは空色の自転車を走らせた。風と競争するように、過去から逃げるように。

初夏の陽差しは強く、ぼくはうっすらと額に汗をかいた。草原は陽に輝き、緑色に燃えていた。その中の一本道を、ぼくの自転車は走りつづけた。自転車のうしろには、大きな荷物が乗っている。ぼくは遠い遠い土地から、何日も何日も長い道のりを旅してきた。

なだらかな丘、一面の草原、空は晴れわたり、白い雲がぼくと同じように、あてもなく旅をつづけている。

丘を越え、自転車はゆるやかな坂道をすべるようになっていった。その先には川があり、やがてぼくは石でできた橋を渡った。

村の入口の標識を過ぎて少しくくと、右側に高い給水塔が見えてきた。給水塔のそばにはポンプ小屋があり、その先に小じまりとした家が軒建っていた。

のどが乾いていたぼくは自転車をおり、その家のドアをたたいた。

ドアが開いて出てきたのは、年をとった男だった。ぼくが水を頼むと、彼はおだやかな笑顔で、疲れた顔のぼくを家の中へ入れてくれた。彼はぼくに椅子をすすめ、冷たいミルクを持ってきてくれた。

ぼくは礼を言って、そのミルクを一気に飲みほした。乾ききったのどに、それはとても気持ちよく感じられた。

彼はオットーという名前で、村の水をすべてまかなう給水塔を管理していた。オットーはぼくに、自分の仕事や村のことを楽しそうに話してくれた。

ぼくは彼と話しているうちに、それまでの疲労もうすれ、安らぐことができた。

それに、彼がぼくの過去を根ほり葉ほり聞かないのも、ぼくにはうれしく感じられた。

オットーはぼくが行くあてもないのを知って、言った。

「きみさえ良ければ、ここにずっといてもいいんだよ」

ぼくはここで親切な彼の仕事の手伝いをしてもいいと思った。もし仕事に向いていなかったり、ここが自分の安住の地でないことがわかれば、ふたたび旅に出ればいいのだ。ぼくが、よろしくお願ひしますと言うと、オットーは喜んだ。そして、彼はつけくわえて言った。

「ただしね、この村ではみんな、道を行くのに一輪車に乗らなければならぬんだ」

「ぼくは一輪車になんか乗れないし、一輪車を買うお金も持っ

ていませんが」

「それなら、心配いらぬ。きみなら、すぐに乗れるようになるから。それに、一輪車は、きみの乗ってきた自転車を、村の機械屋が作りなおしてくれるよ」

ぼくは、すべてをオットーにまかせる気になった。ぼくは自転車で荷物をおろし、彼に案内された部屋に運んだ。こぎれいにかたづけられたその部屋は、ぼくにとても気に入るものだった。

その日の夕方、村から少女が新鮮な野菜をカゴに一杯、とどけにきた。彼女はオットーのところへ、食料品や雑貨を運んでくるのが役割だった。もちろん、彼女は一輪車に乗っていた。オットーは彼女にぼくを紹介して、帰りにぼくの自転車を機械屋のところへ持って行くように頼んだ。ぼくは、一輪車に乗って自転車を押しながら村のほうへ帰っていく彼女のうしろ姿を、感心して見送った。

数日後、機械屋が一輪車に乗って、荷車をひいてきた。荷車には給水塔のための何かの部品と、空色の一輪車が二台つんであった。

その日から、ぼくは一輪車に乗る練習をはじめた。オットーと食料品をとどけにくる少女が、その練習を手伝ってくれた。

一週間もすると、ぼくは自由に一輪車に乗れるようになった。さっそく、ぼくは一輪車で村の方へ出かけてみた。村に近づくとき、一輪車に乗った村人たちが、見なれないぼくを笑顔で受け入れてくれた。村中をぼくは走りまわった。

村の家々は色とりどりの屋根が美しく、村人たちもみんな快活だった。

その後、少女と二人で村の反対側のはずれまで行ったことがあった。村の入口と同じように川が流れていて、石の橋がかかっていた。その前までくると、彼女はぼくを止めて、村のしきたりを教えてくれた。ここから先へはぼくたちは行ってはいけないということだった。

「どうして」ときくと、彼女は、この村に長く住んでいればわかるだけ答えた。

ぼくは毎日を充実して暮らした。オットーから、ポンプや発電機の保守、点検、修理、補助ポンプの動かしかた、定期的な給水タンクの清掃、ペンキの塗りかたなどを習った。森は紅葉し、秋も終りに近づく頃には、ぼくはオットーの仕事を手伝い、真似できるようになった。彼はぼくを信頼してくれ、ぼくは自分の町から逃れて、この村にきたことを、少しも後悔していなかった。

オットーが給水塔から転落したのは村にちらほらと雪の降った頃だった。前夜に降った雪が、給水塔の鉄骨に凍りついてい

た。オットーは点検のために給水塔に上がり、足をすべらせたのだ。

オットーはひどく足を痛めた。医者の治療もむなし、もとどおりにはならなかった。

オットーは寂しそうに言った。

「歩けるようにはなるだろうが、もう一輪車には乗れないよ。うだ。そろそろ、私は次の村に行く時期がきたようだ。それが、この村のしきたりだ」

そして、オットーが次の村へ越す日がやってきた。寒い日だった。オットーは荷車に横たわり、そのまわりを一輪車に乗った村人たちが囲んだ。

オットーも、村人たちも、みんな口を閉ざしたままだった。ぼくもその行列に、黙ってついていった。横には少女がぼくをなぐさめるようにならなっていた。

荷車と一輪車の長い行列は、静かに冬空の下を進んだ。そして、村の反対側の橋のところまでやってきた。橋の向こう側にはぼくの知らない人々の一群が待っていた。彼らは誰も一輪車に乗っていないかった。

ぼくは少し前から、わかりはじめていた。

(こちら側は一輪車の村。そして、向こう側は一輪車に乗らない人たちの村だ。オットーは橋を渡り、新しい生活をはじめののだ)

橋の手前の広場でオットーの荷車は止まり、ぐるりとそれを一輪車が囲んだ。ぼくは前に進み出て、彼と握手した。彼の目を見ると、彼は気まずさをかくすように口をひらいた。

「一輪車はすっかりうまくなったじゃないか。もう他の人たちと変わらない。給水塔もすべてきみにまかせられるし、きつと、うまくいくよ。それに彼女がいるしね」

オットーはぼくのとなりの少女のほうを見た。彼女は恥ずかしそうにうつむいた。

やがてオットーを乗せた荷車は、みんなの見守る中、橋を渡っていった。そして、真ん中で向こう側の人たちに渡された。ぼくはオットーとのこの別れをしっかりと心にきざみつけておこうと思った。それに、またここにくれば彼と会えるかもしれないと思った。川をはさんではあるけれど。

灰色の空の下の荘厳な儀式は終り、人々の群れはとけはじめた。川の水はなにごとまなかつたように、ゆるゆると流れてい

(『火星の砂時計 株式会社サンリオ1988年 現在は絶版)

その朝も目を覚ますと仮面をつけ、鏡に向かった。にせものの笑顔がそこにある。人工的すぎる、口もとだけでしか笑っていない。その他の部分は、目もおも無表情ですらある。そしてなによりも、その無個性な笑顔はみんなと同じなのだ。人と同じであることは幸福なのだと思ふは言うが、ぼくはそれに息苦しさを感ずている。

鏡の中のぼくの顔は笑っている。みんなと同じ、昨日のぼくと同じ、そして明日と同じ笑顔なのだろう。しかし、仮面の下のぼくは泣いている。ぼくはぼくでありたい。ぼくはいろんな表情をもちたいと、さげんでいる。鏡の中の仮面はそれを隠している。

学校へ向かうぼくはみんなと同じ笑顔をしている。黙々と人波が過ぎていく。彼らは仮面の下で、どんな顔をしているのだろうか。ぼくのように、疑問や怒りを感じることはないのだろうか。

授業中もそのことばかり考えていた。先生は社会を教えている。……つまり、市民が仮面をつけたことよって、人と人との摩擦はすっかりなくなり、平穏な毎日を送れるようになった……。

先生は教壇の上で仮面に笑顔浮かべ、熱弁をふるっている。確かに、怒った顔で授業をするより、このほうがいいのかもしれない。だが、いつも同じ笑顔の先生にも足りなさを感じるのも事実だ。

「……この便利さを、一度手にしてからは、元に戻るわけにはいかなかった。やがて、この仮面は法令化され、制度として確立されるようになった……。」

ぼくは隣の友人の顔を見た。必死にノートをとっている彼の顔も笑顔だった。それと同じ笑顔が四十個（ぼくの笑顔も含めて）先生に向けられているのを、先生が同じ笑顔で受け止めている。どうもこっけいに思えるのだが、隣の友人は奇妙に思うことはないらしく、静かにノートに鉛筆を走らせている。「……きみたちも現在、義務として仮面を着用しているわけだが、不便を感じたことがあったらどうか。考えてもみなさい。もし、きみたちが仮面をはずし、喜怒哀楽をそのまま表したりしたら……。この世は大混乱に陥るだろう。人は憎しみ合い、ののしり合い、争いが絶えなくなるだろう。いつもニコニコ、平和な世界、笑顔絶やせず、明るい社会。仮面はわたしたちに真の平和と自由を与えてくれたのだ……。」

ぼくは友人にきいてみた。

「先生の今の話、おかしいと思わない？」

「なぜ？ 笑顔のおかげで、ぼくたちはけんかをしないですんでいるんだろ。」

彼は笑顔で答えた。その仮面は美にこやかに見えた。しかし、本当に仮面の下でもそう思っているのだろうか。ぼくだけが変な考えにとりつかれているのだろうか。

「……仮面をはずすという反社会的な行為が、人々に不安と恐れを与えているのは当然だ。そのような者を排除して、健全な社会を保とうとするのは……。」

「しかし、みんなの仮面の下に隠しているのが本当のぼくたちの姿じゃないのかな。」

「おい、そこ。さっきから、うるさいぞ。静かに！」と先生は笑顔でぼくに言った。

ぼくはしょんぼりしながら、その日、一人で帰った。しかし、素顔とは関係なく、その時の仮面はいつもの笑顔のままだった。だから、だれもぼくの心の内を讀むことはできなかった。この仮面はある意味で便利かもしれないが、ぼくにはひどく味気ないものを感じられた。寂しい時は寂しい顔を、悲しい時は悲しい顔をしたかった。

やがて、ぼくは街の東側を流れる川の公園のところまでやってきた。川の向こう側は自然保護区の森になっていた。秋になり、森は赤や黄の色彩にあふれていた。こちら側は川岸がコンクリートで固められ、公園になっていた。川沿いのイチョウの木は等間隔に並んでいて、黄金色の落ち葉が歩道をうずめていた。

ぼくはぼんやりと対岸の森林地帯を眺めた。そして振り返ると、高層ビルのぼくの街があった。この橋のない川を隔てて、あまりにも自然と人工物が対立しているのに、改めて驚いた。自然保護区は荒らされてはならない聖域だった。

イチョウの木の陰に女の子がいた。ぼくと同じぐらいの年齢だろう。街から隠れるようにして、向こう岸を見ていた。ぼくは気づかれないように何本か離れたイチョウの木のそばで彼女を見守った。彼女の顔はみんなと同じ笑顔だった。ところが、彼女は次に、両手で仮面を覆うと、そっとそれをはずしたのだ。ぼくは思わず息を止めた。事の重大さに胸をどきどきさせながら周りを見回してみたが、だれもいなかった。

彼女は素顔になると、遠くの森をもう一度見つめ直した。彼女の素顔は寂しそうで、悲しみさえたたえていた。そして、美しかった。

ぼくは彼女のその行為が違法であることがわかっていながら、不思議とがめる気持ちにもならなかったし、警察に通報しようとも思わなかった。彼女はぼくと同じ側にいる人間にちがいはなかった。初めて同類に会えたのだ。

その夜、ぼくはなかなか眠れなかった。なぜ、あの時、声をかけなかったのかと悔やんだ。ぼくは、仮面をはずした彼女と一緒にいるところを、だれかに見られるのを恐れたのだ。ぼくは自分の身が大事だったのだ。結局、勇気がなかったのだ。せつかく自分と同じ側にいる人間と出会えたのに、その機会を自分で逃がしてしまったのだ。

夢の中に彼女が現れた。笑顔の仮面をはずすと、悲しい素顔が現れた。彼女はぼくを、遠くの方を見つめるようなまなざしで見つめた。ぼくに失望し、軽蔑しているようにも見えた。

次の日、ぼくは再び公園に行ってみた。しかし、その場所に彼女はいなかった。

ぼくはどうしてもあきらめきれなかった。学校はいつものとおりだったし、仮面に疑問をもつ者はいなかった。みんな、統一された変化のない笑いを浮かべていた。

その後も東の公園に行くのがぼくの習慣になっていた。しかし、彼女に会うことはできなかった。もしかしたら、彼女は仮面をはずしているのを見つけれ、どこかに隔離されているのかもしれない。

数週間が流れ、ぼくはいつものように公園の川岸にたずみ、対岸の森を眺めていた。

秋は確実に深くなっていた。そのころ、学校でうわさされていることがあった。素顔同盟という一団があり、彼らは仮面をはずし、社会や警察から逃れて、この川の上流の対岸の森の中で素顔で暮らしているということだった。

川の水は冷たそうにゆっくりと流れていた。真っ赤に色づいたモミジの一群れが過ぎていった。その流れを見ていたぼくはふと妙なものを見つけた。

仮面だった。笑顔の仮面が川に浮いているのだった。その顔は彼女の顔に似ていた。ぼくは木の枝を折り、その仮面を拾い上げた。それはまがいなく彼女の顔だった。彼女は川の川上流で、仮面を捨てたのだ。

ぼくはこの機会を逃がしたら二度と彼女と会えないだろうと思った。ぼくはためらいもなく、その川を上流に向かって歩きだした。

「あの船 廢船にすることになったぞ」
父親が、ぼつりとコージに言った。

コージは寂しそうな目をして、父親の言うことを黙って聞いていた。

「島の向こうの漁場に沈めることになった。あの船は、ちょうどいい人工漁礁になるだろう。それが、一番いい。おじいさんもきつと、喜んでくれるだろう」

次の日、コージは漁港に一人でやってきた。コージの祖父のモリオの残した漁船は、漁港につながれたまま、静かに揺れていた。コージは遠い海を見る。外洋の荒い波が防波堤で白くだけちつて、しじきが陽の光をあびてきらめいている。防波堤の突端には、白い灯台があった。防波堤にかこまれた漁港は、おだやかに静まりかえっていた。その日の漁に出る漁船が、機関を鳴らしながら波紋を残して進んでいく。

コージは思う。この船だって、祖父のモリオがいたころは、みんなの先頭をきつて漁に出たものだ。この船は、船足も速かったし、波をけたてて進むその雄姿は、いま思い出しても胸がわくわくする。しかし、いまはモリオはいないし、この船はもうじき廢船になってしまう。コージは残念でしかたがなかった。コージの父親は役場に勤めていて、漁業をつづつもりはなかったし、コージはまだ漁師になるには子供すぎた。それに、この町では新しく漁師になろうという若者などいなかった。みんな、もつと割のいい仕事についている。年をとった。前の時代の男たちだけが、細々と漁業をつづけていた。

モリオが大切にしていたこの船が、廢船になるのもしかたがないことかもしれない、とコージは思った。

コージは、モリオにつれられて漁に出た懐かしい日思い出してみる。島の向こうの漁場で網を入れると、おもしろいように魚がとれた。たくましいモリオの日焼けした太い腕とは、くらべようもなく細い非力なコージの腕に、獲物のあふれる網は重すぎた。だが、コージはその手ごたえを心地よく感じながら、モリオに負けないように重い網を船に引きあげた。船が魚でいっぱいになると、モリオはポケットから大事そうに防水の懐中時計をとりだし、パチンとふたをあけて時刻を見る。そして、「もう、こんな時間だ」とコージに言い、帰りじたくをはじめる。

海に生きるモリオの力強い姿をまじかに見ている、コージは自分にもこれだけ自信と情熱を持てる仕事を見つけていることができてきたらうかと思つた。苦勞の多い、また危険といつともとなりあわせの漁師という仕事を、長い間つづけているモリオをコー

ジは畏敬の目で見ていた。

あの日、モリオは船の上でコージに話しかけた。

「私もすっかり、年をとつてしまった。いつまで、漁師をつづけられるかと思うと不安にもなる。外からはわからないが、実は、私の身体はもうぼろぼろなのだ」

彼はそれまで、愚痴や弱音を吐いたことがなかったで、コージは奇妙に感じた。

「私は海に生まれ、海とともに育つた。そして、もちろん死ぬ時も海で死にたいと願っている。陸の上で死に、暗くて冷たい土の中に眠ることを考えるとぞつとする。私は死んだら、海に帰りたいのだ。長いこと、私は漁をつづけ、数えきれないほどの魚をとつてきた。それは、すべて海が私に与えてくれたものだ。そして、私はその海に帰る。それが一番、自然なのではないだろうか」

モリオは、波間を見つめながら言った。

「私の遺体を、魚がエサとして食べてくれたらいい。何万匹もの魚が、私を食べつくしてくれたら、とれだけ幸福で清らかになれるだろう。そして、魚に生まれ変わった私は、この大海原を自由に泳ぎまわることができる。それを想像すると、私は生命の永遠性を感じることができ」

魚影が、さつと船の近くを走つていった。モリオは、それを指差して言った。

「あの魚は、海のある限り、形を変えながら永遠に生きつづける。それは、うらやましいことではないだろうか」

モリオは熱っぽく話した。コージは、いつもと違うなと思いつつ、彼の話を聞いていた。そして、モリオがコージに懐中時計を渡した時には驚いた。

「この懐中時計は、きみにあげよう。私が持っているよりいいだろう」

コージは、はじめは遠慮していたが、あまりにモリオが強くすすめるので最後は受けとることになった。その時、コージは言葉にならないある予感を感じていた。

モリオが漁に出て、行方不明になったのはそれから間もないころだった。

モリオの船が海上を漂っているのが、他の漁船によって発見された。モリオは波にさらわれたか、足をすべらせたかしたのだろうと言つたものもいたが、コージは別のことに確信を持っていた。しかし、誰にもそのことは話さなかった。モリオの遺体は、どれだけ捜しても見つからなかった。

モリオの漁船を沈める日がやってきた。

島の向こうの漁場に、モリオの漁船は引かれていった。コージと父親は、他の漁師たちとともに、モリオの漁船を引く船に

乗っていた。モリオの漁船の船底には、重しのためにセメントが流しこまれていた。操舵室の舵輪には、モリオがコージにくれた懐中時計がぶらさがつていた。コージは考えた末に、こうするのがいいと決心したのだ。永遠の時とともに海に深く眠るモリオのために。

目的の場所にくると、漁船をつないでいた綱を解き、モリオの漁船の船底に穴があげられた。その穴から、どつと海水が漁船の中におどりこんでくる。コージたちの見守る中、モリオの漁船は、みるみるうちに海の中に沈んでいく。コージは悲しさをこらえながら、しかし、また永遠に海に生きつづけるモリオに、彼の愛する漁船を返してあげるのだと自分に言いかけた。漁船は、船首を残して沈んでいく。船のまわりには渦が巻き、海水が泡だっている。そして、ついにモリオの漁船は、その姿をすべて海の中に没した。コージたちは、それをおごそかに、黙したまま見送っていた。

その時、異変が起こった。漁船が沈んだ海面に、魚の群れの影があらわれたかと思つと、その数はすこし勢いで増してきた。コージたちは驚きながら、その何万匹もの魚群を見つめた。魚は、海面からあふれるほどに次から次へとふえつづける。銀鱗がきらめき、水面からたくさんの魚がはねわたる。

彼らは、これだけ多くの魚の群れを見たことがなかった。コージはモリオの言ったことを思い出した。モリオは海に帰り、魚に生まれ変わる。それも、何万匹もの魚に。今、目の前にいる数えきれないほどの魚の大群は、モリオの新しい生命の姿なのだろうか。

魚の群れは海面からもりあがり、空中に飛びはね、しじきをあげた。そして、奇跡が起こった。

沈んだはずのモリオの船が、ふたたび浮かびあがってくる。無数の魚たちにかこまれて、幽霊船のように海水をしたたらせて、海上に浮かびあがってくる。やがて、モリオの漁船は、そのもとの姿を魚群の中心にすつかりとあらわした。

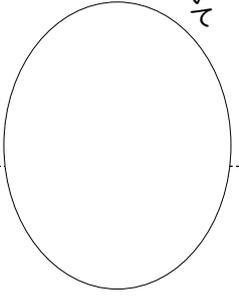
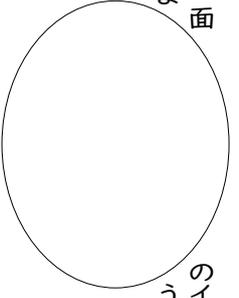
コージたちは息をのんで、その奇跡を見守りつづけた。そして、もう一度、モリオの船が青い海の中に、ゆつくりと帰っていき、そのすべてが彼らの目の前から完全に消え去るまで、誰も言葉を発しなかった。

（『火星の砂時計』 株式会社サンリオ 1988年 現在は絶版）

素顔同盟プリント年組番

○仮面
みよ

のイメージを書いて
う。



○ぼくの住む街を地図にして書いてみよう。
○この小説からうけとれる事柄を考えて書いてみよう。

4